

～子供たちの夢をかなえる教師になる！～

東京教師養成塾通信

発行日 平成30年7月21日
＜第3号＞
発行元 東京都教職員研修センター
研修部教育開発課
電話 03-5802-0318

●第5回講座「主体的・対話的で深い学びの実現」

平成30年6月23日（土）に、国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官 渋谷 一典先生を講師に招いて、学習指導要領の改訂と主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善のポイントについて、講義・演習を行いました。今回は、教職に就くことを志す大学生に講座を公開し、関係大学の学生を中心に約150人の参加がありました。講話では、学習指導要領改訂の背景、方向性、探究的に学びに向かう子供の姿、言語活動の充実の視点等を踏まえた授業改善の方向性についての説明がありました。その中で、受講者同士で話し合ったり、話し合いの内容を紹介したりすることを通して、主体的・対話的で深い学びについて具体的に体験できるような演習を行いました。また、実際の授業の写真を提示し、教師が指導すべきポイントについて理解を深められるような取組を行いました。塾生及び一般の大学生が、生き生きと講義を聞き、話し合いに取り組む姿が見られました。

【塾生の感想より】

- ・3つの資質・能力の育成を目指すために、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」といった視点を意識し、児童の実態に即した内容をイメージしながら授業を行うべきであることを学んだ。

●第7回講座「授業づくりの基礎⑤」「単元指導計画の作成について、算数の授業づくり」

平成30年7月7日（土）に、授業づくりの考え方や指導方法について学ぶことをねらいとして、第7回講座を行いました。

【小学校コース】

小学校コースでは、東京教師養成塾担当の村上 正昭指導主事が「学級経営の意義とは」をテーマに、学級経営の四つの視点に基づき留意したいこと及び学級経営案に基づく具体的な指導の例について説明を行いました。その後、東京教師養成塾担当の上野 研二教授、近谷 幹男教授、木村 良平教授が特別活動の指導に係る講義と演習を行いました。講義では特別活動の意義や内容、事前の指導と準備、話し合い活動の過程について説明をしました。特に、学級会の活動計画を作成する演習や係活動の指導に関する演習において、塾生は活発に意見交換に取り組んでいました。



－特別活動の指導に係る講義－

【特別支援学校コース】

前半は、東京教師養成塾担当の坊野 美代子教授が「単元指導計画の作成について」をテーマに講義を行いました。特別支援学校での指導の基礎となる学習指導要領や各学校の教育課程、年間指導計画を基に、どのような視点で各教科等の単元指導計画を作成していけばよいかについて説明しました。後半は東京教師養成塾担当の信方 壽幸教授が「子供は、どうして、つまずくのかー障害のある子供の「算数」「数学」の指導ー」をテーマに講義を行いました。数の指導における子供のつまずきを考えながら、数の基礎概念の系統的な指導の留意点や導入の工夫、キューブを使う理由、集合数と順序数について解説しました。



－単元指導計画についての講義－



－数の基礎概念についての講義－

【塾生の感想より】

- ・児童一人一人がよさを生かすことのできる学級にするために、信頼関係を築くこと、児童理解を丁寧に行うことを基盤として、授業づくり・環境づくり・集団づくりに当たっていききたい。
- ・児童・生徒の実態を的確に把握し、課題の改善・解消を目的として学習者も教師もわくわくするような魅力ある単元指導計画を作成していきたい。
- ・算数の指導では、単純な計算問題であっても、具体物や色の設定によっては子供が理解できなくなる場合もあるため、教材研究をしっかりと行って授業に備えたい。

●英語に関する講座（第1回 平成30年6月23日（土）、第2回 平成30年7月7日（土）実施）

塾生が英語及び外国語活動の指導の基礎を身に付けることをねらいとする英語講座を、年間6回実施しています。指導法習得、クラスルーム・イングリッシュや東京都独自教材の活用等についての理解が深められるように、第1回目の講座では、確認テストの実施と自己紹介やよく使う英語表現について、第2回目の講座ではクラスルーム・イングリッシュを中心に、英語及び外国語活動の授業における雰囲気づくりについての講義及び演習を行いました。

【連載シリーズ コラム④】

◆ ねらいに即した授業づくり ◆

東京教師養成塾教授 安齋 正彦

児童が生き生きと主体的に活動することは誰しもの願いです。その願いを達成するためには、ねらいに即した授業を展開することが大切です。東京教師養成塾では、特に、ねらいと手だてを明らかにすること、つまり、身に付けさせたい力は何か、中心となる学習活動は何かを明確にして、ねらいがぶれない軸のしっかりした授業を展開するよう指導を進めております。

まずは、単元の教材解釈や資料分析を基に、単元の指導目標を踏まえた指導計画を作成し、その指導目標を踏まえて1時間ごとのねらいを設定する段階です。ここでは、1時間ごとのねらいを達成することが単元の指導目標の達成に結び付くことを意識して本時のねらいを設定するよう助言をしています。

次は、そのねらいを基に本時の展開を構想する段階です。ここでは、学習指導要領と教科書をしっかりと読み込み、めあてや課題がねらいを踏まえているか、適切な発問や学習活動になっているか、児童の実態を十分に把握しているかなど、発問計画を含め構想を綿密に練り上げるよう助言しています。

そして、練り上げた構想を基に、導入では、児童の興味・関心が高まるような動機付けと主体的な活動を促すような課題提示をし、分かりやすい吟味された発問と指示を基に、ねらいを達成させるための学習活動の展開をするように働き掛けています。

まとめをする段階では、ねらいに即して授業の振り返りをするよう促しています。この振り返りは、児童が本時の活動の意味や価値を実感し、次の授業に主体的に取り組むことができるようにするために大事にしています。塾生には、児童の言葉でまとめるよう指導しています。加えて、児童一人一人がめあてを達成し、満足感や成就感を味わうことができるようにするとともに、児童の発言や活動を的確に捉え、柔軟に対応し、ねらいから外れないように授業を展開していくということを、授業をする側として塾生には、特に、大切にさせています。

東京教師養成塾では、今後とも、どの塾生も特別教育実習校における日々の実践を通して、児童が生き生きと活動できるような授業づくりについて指導してまいります。

【連載シリーズ コラム⑤】

◆ 見つけ、見渡し、学び続ける—自己を振り返り、学び続ける姿勢— ◆

東京教師養成塾教授 小林 巧

7月の授業研究の協議会の際、塾生が「学習の構えの確認や明確な指示・発問を出すことに心掛けました」と自評で語っていました。養成塾生は、毎月の授業研究で、前回に指導を受けた課題の克服を意識しながら授業実践を積み重ねています。自分の指導と子供の学びを見つめ、自己を振り返りながら、教師になるための指導力の向上に努めています。

東京教師養成塾では形成期、伸長期、充実期の3期に分けて段階的に塾生の指導・育成を進めています。形成期が終わり、特別教育実習を振り返り、見渡す時期を迎えました。自分や子供を見つめ、学級集団や全体を見渡すことが、次の段階に進む上で大切なことです。

まず、自分の授業実践をしっかりと見つめます。そうすることで自分の課題が明確になり、課題解決のために努力することにより、指導力が身に付いていきます。「見つめる」ことを通して、日々変容する「子供」の様子を把握し、どの子供に何を指導すればよいのか、そして指導している「自分」のスキルはどうだったのか振り返ることができます。常に自己評価しながら修正を加えるPDCAサイクルを意識して実践できるように指導していきます。

次に、幅広いものの見方や考え方、大所高所から物事を見渡し、本質を見られるようにします。広い視点から見渡し、全体を掌握する力を付けることで、様々なものが見えてきます。同時に、全体を見渡すことによって自分自身を見つめ直すこともできます。

さらに、常に学び続けることが大切です。学ぶことをやめてしまったら、そこで成長はストップしてしまいます。「学べば学ぶほど、自分が何も知らなかったことに気付く。気付けば気付くほど、また学びたくなる。」という自ら学ぶ姿勢をもち続けて欲しいと願っています。

9月からは伸長期に入り、大きく伸びる実習期間となります。ここで身に付けた実践的な指導力が、教師になってからの資質・能力の目安になります。「実習の中で常に自己を見つめ振り返り、課題克服のために全体を見渡して努力する。」という学び続ける姿勢が教師になるための力を身に付けていくのに必要なのです。

教師でいる限りは、いつまでも学び続けなければなりません。常に教師として、真摯に学ぶ姿勢と教育に対する情熱をもって臨むことが、何にも代えがたい原動力となります。今後とも、自己を振り返りながら、養成塾で目指す三つの教師像に向かって、学び続ける態度を育成してまいります。